

学生定住促進に向けたはちのへエリア体験事業 (アナザースカイプロジェクト)について報告

Report on Hachinohe area experience project (Another Sky Project)
for promoting students to stay in the community

井 上 丹

学生定住促進に向けたはちのへエリア体験事業 （アナザースカイプロジェクト）について報告

井 上 丹

1. はじめに

はちのへエリア（八戸市、三戸町、五戸町、田子町、南部町、階上町、新郷村、おいらせ町の8市町村、以下、『本エリア』という）では、図1のとおり、20～24歳の年齢階級において、減少が顕著になっている（*1）。本エリアには、八戸学院大学、八戸工業大学、八戸学院短期大学、八戸工業高等専門学校が立地し、約3,000人の学生が在学しているが、卒業後、県外に流出する傾向が高く、特に県外出身者はその傾向が顕著である。その理由の一つが、在学中に地域との関わりが少なく、地域を知らないため、本エリアへの愛着が持てず、出身地や首都圏での就職を希望し、本エリア外に流出していくケースが多い。例えば、八戸学院大学においては、運動部の学生募集に力を入れており、運動部に所属している学生の8割程度が本エリア外の出身であるが、卒業後本エリアに残る学生は1割もいない状況である（*2）。

このような状況を踏まえ、本事業では、学生が本エリアについて理解や愛着を深めるきっかけを作るべく、地域住民や地域で働く社会人との交流を図るとともに、観光地や郷土料理、そして仕事などを体験することで、本エリアでのキャリアやライフスタイルを考えることにつながり、卒業後の定住を促進しようと考えた。本エリアが「理想の居住地や第2の故郷（アナザースカイ）」になることを目標に、表題のようなプロジェクト名をつけている。

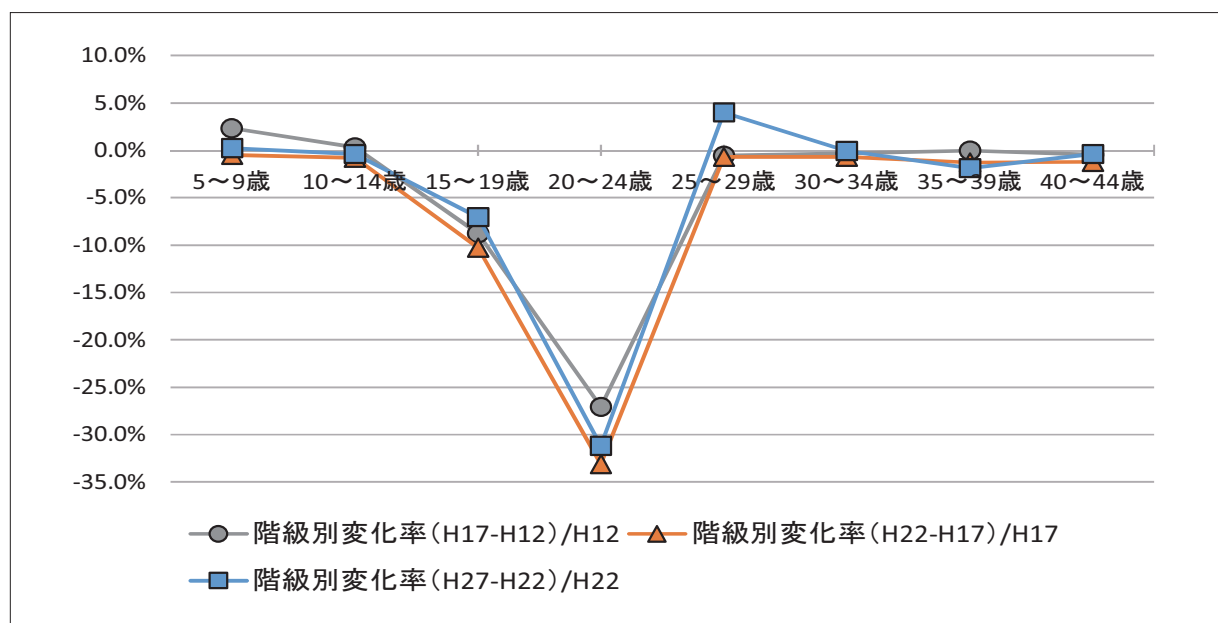


図1 本エリアにおける若年者等の年齢階級別変化率

2. 事業内容について

(1) 事業実施に向けて

八戸市総合政策部と連携し、一般財団法人地域活性化センターより平成30年度移住・定住・交流推進支援事業補助金の交付を受けることになった。その条件として、本学の学生だけでなく、本エリア内のなるべく多くの大学生が事業に参加することとなったため、八戸工業大学感性デザイン学部と協力を依頼し、学生の参加を呼びかけた。また、成果外の授業となるため、学生のスケジュールを考慮し、8、9月の夏休み期間中に全5日の実習型集中プログラムとして実施できるように設計した。

(2) 事業参加者

八戸学院大学から9名、八戸工業大学から8名の計17名が参加。出身地は本エリア内10名、青森県内5名、青森県外2名。男子5名、女子12名。大学1年生が5名、2年生11名、3年生1名となった。

(3) 事業内容構築

最初の2日間は導入プログラムとして、1日目（8月8日）は、八戸市中心街のサテライトキャンパスにて参加学生同士の交流とフィールドワークの心得などを説明、2日目（8月9日）も八戸市中心街にて社会人4名を招き学生との座談会、その時間に学んだことをレポートにまとめ発表するという内容にした。なお、プログラム設計については、前回（2018年1月）同様のプログラムを実施した際に設計と運営に大いに携わっていただいた観光まちづくりアドバイザーの小田展正氏に今回も依頼した。小田氏は、株式会社リクルートじゃらん編集部にて企画力のトレーニングとプロジェクトマネジメントを経験、その後じゃらんリサーチセンターにて高知県地域観光プロデューサーとして観光キャンペーンのプロデュースや人材育成の支援などを担当、ローカルビジネスの事業構想や観光コミュニティの支援事業を行った経験がある。

次の2日間はメインとなる体験プログラムである。本事業は定住促進を目的とするため、地域で働き生活をすることを実感できるよう、観光のように複数個所を見学したり体験したりするより、1つの地域で1つの業務を2日間連続で体験するような流れを意識した。本エリアの産業振興や地域課題解決の業務体験、地元の食材を使った食事を体感し、地元住民との交流を通して自分が生活するイメージを持ってもらうというコンセプトでプログラムを4種類構築。学生も4チームに分かれ、それぞれ希望や日程に合わせて1つのプログラムを選択し8月29日～9月8日の期間で計2日間体験した。

最後の1日（9月10日）は、再び学生全員が集まり、各チームの体験プログラムについて実施内容と成果を資料にまとめて発表する振り返りプログラムとした。各大学の教職員に加え、行政関係者、体験プログラムの受け入れ先企業や団体、報道関係者を招き、学生の発表に対して助言をいただき、体験したことを今後のキャリアに活かせるような学びの場に設定した。

3. 事業実施

(1) 導入プログラム

まずは本学教員からプログラムの背景や目的、内容、成果、学生に期待することなどを説明。その後、参加者全員で大きな円になって座り、自己紹介と今の気持ち、プログラムに対する期待を発表した。初対面の学生が多いため、緊張感があり、発表が苦手という学生が多く見られた。

次に学生のチーム形成に向けて、簡単な質問でランダムなグループを作り、学生同士交流するワークを何回か繰り返した。体験プログラムの希望ごとに4, 5人1チームを形成し、関係性構築のワークとして、チームとは何かを改めて説明し「いいチーム」と「悪いチーム」の特徴、チームに貢献できることを自分で決め、役割を決めた。

その後、コミュニケーションや対話についての基本的な知識を説明。具体的な言葉の重要性を伝え、デモンストレーションを見せながら、自分の考えを言葉にするワーク。ペアワークで、質問者と話者に分かれ、話者が質問に答え続け、質問者は納得した言葉をメモする。ワークからの気づきや自分に起きた変化を言葉にして振り返り、発表とフィードバックの練習を数回繰り返した。この時点で、最初の状態から明らかに緊張感はなくなり、学生のコミュニケーションは活発になっていた。学生からは、「相手の言っていることを聞く、理解、話すという過程はよく考えると難しい。コミュニケーションを不得意とする人はこの過程のどれかが出来ていない。」「主張と根拠、具体的な言葉について学び難しいと思った。うまくまとめながら話の筋を通さないと説得力がなくなる。」「質問に答えられなくてもどかしくなった。ありきたりな理由だと興味がわからない。」「改めてチームとは何かを再認識することができた。」といった感想が出た。

2日目、本エリアで働き暮らしている社会人4人との座談会を実施。はじめに社会人4人から簡単な自己紹介をしてもらい、学生の1チームにそれぞれ一人の社会人が加わり、約15分間、学生から質問を受け、社会人が全4チームを回った。社会人からは、仕事内容ややりがいに加え、自身の学生時代の経験と逆にいま経験した方が良いことなど助言。今回の社会人は県外就職後Uターンし自分が納得する仕事をやっていたり、本エリアで起業したりと経験豊富で、学生には刺激的だったようだ。その結果、次のような感想が学生から多く上がった。

- 積極的に人と関わることとコミュニケーションが大事。仕事や趣味の幅が広がる。
- 好きなこと、やりたいことから挑戦してみる。失敗しても若ければやり直しがきく。
- 自分にとって有意義な時間の投資。自分が何に時間を使っているか考え、まずは動く。



図2 導入プログラムの様子①



図3 導入プログラムの様子②



図4 社会人との座談会の様子①



図5 社会人との座談会の様子②

(2) 体験プログラム

【Aチーム】地域で起業した女性社長の仕事体験

地元食材を使った病気予防の食事を提供する飲食店を経営し、食育講座や料理教室、講演や執筆をしている女性社長のもとで仕事を体験しながら交流した。女性限定のセミナーで料理を提供するため、前日にその準備を行い、当日は配膳しながらセミナーの様子を見学した。この社長は県外での活動経験も豊富で、県外に出てみて地元を客観的に見ることができ、地元の野菜は新鮮で水も美味しい、無駄な味付けをしなくても食事は美味しいことがわかったと話した。それを女性の視点でおしゃれに可愛く写真を撮り、SNSなどで発信し、広報活動を行っている。

参加学生は、「地元と県外の違いを感じながら暮らしたい。いろいろな経験をつみたい。県外に出て、青森と比較して青森の良いところを再発見する。」「知識を持つことで健康になったり元気を取り戻せたりできる。中途半端でもやらないよりは良い。説得力も増し、視野も広がる。」と、地元食材の魅力に改めて気づき、女性ならではの働き方や生き方を学んでいた。



図6 社長の店にて料理体験と交流



図7 女性セミナーにて盛付

【Bチーム】地域特産品「南部せんべい」を調査し提案

本エリアの郷土料理であり特産品の南部せんべいが、もっと売れるための改善点や、学生オリジナルの南部せんべい商品を考えるというテーマ。合計7か所の販売店を回り、造っている現場を見学し、様々な種類のせんべい商品を購入。製造者を調べたり実際に食べたりして特徴や違いを分析した。また、せんべい汁の普及活動を行っているボランティア団体の活動を見学

し、団体の人たちと交流し、せんべい汁の歴史や特色、課題などについて学んだ。

学生からは、「普段は何気なく見ていたせんべいも様々な特徴や味があると知られた。販売店によって陳列の仕方が異なっていた。手作りのせんべい一つひとつの作業に真心がこもっていると感じた。地域の製造者は、地元や地域の方々を大切にしていると思った。常連客や地域の方は会社にとって元気の源なのだと思った。」という感想が出ていた。

そのうえで、南部せんべいをもっと買ってもらえる、手にとってもらえる、食べてもらえるためにはどうすれば良いのか。様々な疑問を抱えて、二日を通して答えや理由にたどり着いていた。例えば、「おつまみなのかお菓子なのか区別できない、ターゲットを分け、子ども向けせんべいを子ども向けスナックコーナーに配置するなど、せんべいの種類によって売り場を合わせるべき」といった意見をまとめ、先ほどのボランティア団体に提案した。



図8 南部せんべい製造の見学



図9 南部せんべい焼きを体験

【Cチーム】地域の観光地を体験し、オリジナルの観光プランを提案

観光事業者協力のもと、まず本エリアの観光地を見学。陸奥湊の朝市、燕島、種差海岸、南郷地区の旧小学校跡を活用した施設、五戸町の馬肉料理、国宝が展示されている神社、八戸市中心街の施設や店舗見学など1日で周遊できる限りの体験を実施。学生は訪問したことや聞いたことがある場所であっても、新たな発見や感動があり、地域の魅力を再確認して、それを誰かに伝えたいという気持ちになっていた。

そこで次に、学生によるオリジナルの本エリア観光プランを企画。はじめにターゲットを若い子育て家族と設定し、教員を模擬的な観光客として希望や条件などをヒアリング。自分たちの経験を踏まえてプランを検討、簡単なパンフレットを作成した。観光客役にプレゼンし、フィードバックを受けた。結果としては顧客を満足させられるものとは言えなかった。学生からの反省点として、「ヒアリングが足りず、プランを考えているときに不足に気づいた。必要な情報が何かわからなかった。何を聞けばよいかわからなかったため、準備して質問する必要があった」という点を挙げていた。その後、観光事業者の方からのレクチャーを受けて、今回の経験を学びにしていた。



図10 観光地で地域住民と交流



図11 観光プラン作成で助言を受ける

【Dチーム】新規開店する珈琲店の活用方法を地域住民と議論

南部町三戸駅前に新規開店する珈琲店の2階が空きスペースになるため、地域での利用方法、どのようなコミュニティスペースにするか、オーナーである地域住民の方と共に検討する2日間となった。

まずはこの地域を訪れたことがない学生だったため、周辺を散策し、どのような地域でどのような住民がいてどう生活しているのかを調査した。学生からは、空き倉庫が多い、人が歩いていない、開いている店と開いていない店の区別がつかない、子供の遊び場がないというネガティブな感想が多かった。今回の珈琲店も元は倉庫で、オーナーが現在は燻製製品をつくる工場兼会社として活用していた。オーナーは、地元の人とのコミュニケーションからビジネスに継げており、他の地域から情報を得て、それを地元に活かすような事業を展開していた。そのオーナーとの交流から学生は、大きいことではなくても良いので何かを始めてみることに、頑張っている人を周りは応援してくれること、人任せな考え方をやめることを学んでいた。

次に、オーナーと親交が深い地域の同世代の仲間を集めて、学生と意見交換の場を設けた。多様な意見が出ていたが、共通していることとして、高齢者世代や子育て世代、学生世代など世代間の交流がほぼないため、異なる世代がコミュニケーションを取れる場所として珈琲店が活用できないかという意見であった。そのためには、平日と休日、昼間と夜間で雰囲気やメニューを変えるなど提案が出た。この意見交換を通じて学生は、「集まりたいときに集まれる場所を作ること、地域活性化したいという気持ちが伝わった。」「社会人の人達の貴重な意見を聞き刺激を受け、今回の体験は未来につながると感じた。また、地域愛とは何かを少し理解できた。」と感じていた。



図12 珈琲店周辺地域を探索



図13 地域住民と意見交換

(3) 振り返りプログラム

テーマは「はちのへエリアのまちと人に触れてみて感じたこと・学んだこと」とし、ルールは、チーム全員が発表する、パワーポイントで写真等を使って聴く方がイメージしやすい工夫する、「プロジェクトを通して感じたこと、気付いたこと」「きっかけとなった場面や発言」「その理由」「その学びを今後の学生生活にどう活かしていくか」を盛り込む、発表時間は8分とした。事前に教員側でパワーポイントの骨子は用意していたものの、制限時間3時間という中で、納得のいく資料を作成できた様子だった。また、どのチームも自信をもって前を向きながら、大きな声で明るい表情で発表していたことが印象的であった。最初の導入プログラムで発表が苦手と言っていた学生からは別人のようにになっていた。

4. 事業成果

(1) 学生の学びについて

プログラムの最後に、すべてを通じて学んだことや今後の学生生活に活かしたいこと、地域への定住について学生に振り返りのワークシートに記入させた。1名欠席したため16名の回答となった。まず、5日間のプログラムで最も印象に残っていることは何か、その理由と、プロジェクト参加前と参加後で気持ちや行動にどのような変化があったかについて、結果を表1に示す。なお、固有名詞は変換し文章や言葉の修正を加えているが、学生の意見をそのまま掲載している。学生同士や社会人との交流が印象に残ったと回答した学生が16名中12名と最も多く、地域の食や観光地に対する発見が4名であった。

次に、気持ちや行動の変化についてしてみると、「地域を知りたい、地域貢献したい」という意見が7名、それ以外の9名は、「生き方や考え方、学生生活で挑戦したいこと」という結果になった。いずれも、全てポジティブな変化と言える。

このような結果になった背景として考えられることは、参加者を募る際に、何のために何をやるかを説明し、主体的に参加したいという学生が集まったこと。見学や話を聞くだけの内容ではなく、他大学の学生とのグループワーク、地域の人々との会話、頭や体を使う体験を多くした内容であったことがあげられる。

表1 学生の学びに関する調査結果

No	最も印象に残ったこと	その理由	参加前後の気持ちや行動の変化
1	女性セミナーのトークセッション	自分の使命はなんなのかこれからどう動くか深く考えた。輝いて生きるために	あと2年半、地元にいるからこそできることをする。手踊りで舞ったりいろいろなイベントに出たり手踊りを極めて発信したい。伝統芸能、伝承
2	女性セミナーに参加したこと	いきいきと働く女性を見られたから	自分も誰かに反対されても好きなことをして生きていきたいと思った
3	女性セミナーへの参加	女性の強さを改めて知ることが出来た	もっと八戸のことが知りたいと思った
4	グループで沢山話し合ったこと	今までこんなに意見を交わした経験がなかったからとても良い時間が過ごせた。チームで少しでも仲良くなれて嬉しい	最初は人と話すのが苦手だったけどそれは思っていただけで、もしかしたら自分とはみんなと話すのが好きなのでは？と最後に気づけた。前よりは知らない人とも話せるようになっていそう

5	出会った人がみんな挑戦していること	自分だと踏み出せないような一歩を踏み出せているということがすごいと思ったし、普段から考えて挑戦しているのだと感じたから	留学したいと前から思っていたけど、自分のやりたいことに正直になってやってみればなんとかなるのかもしれないと思った
6	導入プログラムの質問ゲーム	今までにあんなになぜ?とかどうしてとか聞いたこともなかったし答えるのがとても大変だった印象があるから	参加前はただ5日間やり過ごそうと思っていたけれど参加後はすごい勉強になったと思うし様々な人とコミュニケーションをとれてよかった
7	八戸市中心街での夕飯	せんべいの新しいメニューも知れたし美味しかったから	せんべいから八戸について参加前より深く知れた。他の八戸の名所にも行ってみたい
8	せんべいが売っている店をまわったこと	店ごとに何かしらキャラをもつせんべいがあり、どれも魅力的だったから	はちのへエリアの食への見方。一つの食材だけでアレンジの効くものが多いと感じたため
9	社会人との座談会	社会人それぞれの考え方を聞いて面白かった	八戸について、八戸に住んでいる者として少しの知識を得られた
10	体験プログラム	生で八戸に触れられたことは大きい。中でも南郷地区旧小学校で八戸をかなり感じられた	八戸と自分の地元の違い、これからさらにチャレンジしたいと思わせてもらえるプロジェクトでした
11	体験プログラムで八戸エリアの観光地を巡ったこと	このプログラムに参加しなければ絶対に見つけることが出来ない魅力を発見できたから	もともと、課外活動のような外に出て様々なもの、ことに触れることが嫌いではなかった。今後もたくさんの活動に参加しようと思った
12	体験プログラム	町の人と触れ合い八戸の歴史、どんな人が観光に来るのか観光客との触れ合いや繋がりを聞き八戸の人の優しさを知ることができた	私はエリア外から通っている為、八戸については詳しくなかったが八戸の観光地、魅力を知った
13	伝えることの難しさ	町内と町外の人で、町への考え方が違うこと	珈琲店オーナーのように思った事を行動に移したいと思った
14	南部町で実際に住んでいる方の声を聞いた	生の声を聴くことはその地域を知ることの一つになると思った	海外旅行に行きたい！都会は頻繁に行っている歩いているので、国外に行きたい
15	南部町に行き町を見て回り地元の方との話し合いをした	地域の課題を見つけることができた	最初は心配や不安で帰りたいなどか思っていたが今はもっとやりたかったと思う
16	コミュニケーションの難しさ	世代が違う人とのコミュニケーションが難しかったから	思ったより自分の話していることは、みんなのためになっていると感じた

(2) 地域定住について

本事業の目的である学生の地域定住促進について、まず本エリアのまちや人に対する印象がどのように変わったか、①もともと愛着があり、もっと好きになった②愛着はなかったが、好きになった③無関心だったが、興味を持つようになった④愛着があったが、嫌いになった⑤特に変化はない、の5つから選びその理由を回答させた。結果は図14の通り、回答者全員がプラスの変化になっていた。その理由で最も多かったのは、地域について再発見したことが12名、地域の人と交流したことによるものが4名であった。

そして在学中に地域で経験しておきたいことは何かを聞いたところ、「地域への貢献、地域との交流、地域を知る」という活動を回答した学生が10名であった。残り6名は地域とは明言

されていないが、自己成長できるような経験をした
という回答だった。

次に、大学卒業後、本エリアに居たいと思うかどうかを、①卒業後もずっと地域に居たい②卒業後は地域外に行っても、いずれ戻ってきたい③卒業後は地域外に行き、戻るつもりはない④卒業後は地域に居るが、いずれ地域外に出たい⑤まだわからない、の5つから選択させた。プログラム参加前に就職希望地域と、本エリア外を希望する学生には将来本エリアに戻る気持ちがあるかを聞いており、プログラム前後での結果と、回答理由を表2に示す。

参加前は6名が本エリアでの就職を希望しており、それ以外の地域を希望してエリアに戻る可能性がある学生は9名であった。それがプログラム参加後に聞くと、本エリアにずっと居る、地域外へ行っても戻ってくるという学生は11名という結果になった。4名(No. 9, 10, 13, 15)においては、参加前はエリアに残らない可能性があったが、参加後には地域外に行っても戻ってくるという変化が見られた。一方、4名(No. 4, 5, 14, 16)は、もともと本エリアでの就職を希望していたが、地域外へ出る可能性が出てきた。その理由を見ると、今回の経験で視野が広がり他の地域への興味が出てきたことが考えられる。

前項で述べた「学生の学び」という点では参加者全員にとって良い成果を出せたが、「地域定住」となれば必ずしも全員が定住希望になるとは言えなかった。理由として考えられるのは、社会人との交流から視野が広がり、もっと多くの活動をして経験を積みたいというチャレンジ精神が醸成され、地元に留まらず新しいことを知りたいという気持ちになっていること。学生の感想で「もっと地域を知りたい、交流したい」という言葉が出てきたことから、まだ地域で働く、暮らすというイメージ形成までできていないことがあげられる。卒業後も地域に定住する、または地域外へ出て必ず地域に戻ってくるという意識を持つためには、継続した地域交流活動が必要だと考えられる。

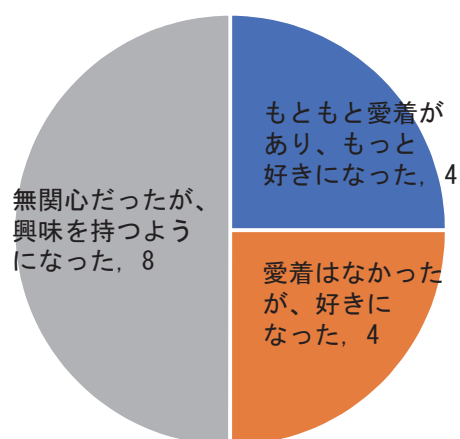


図14 本エリアに対する印象の変化

表2 プログラム参加前後の就職希望地域とはちのへエリア定住の可能性調査結果

No	プログラム参加前		プログラム参加後	
	就職希望地域	エリアに戻る気持ち	卒業後エリアに居たいか	理 由
1	その他	ない	まだ分からない	地域外に行って気づくことがあると思う
2	はちのへエリア		ずっと居る	ずっと八戸に居たいから
3	出身地	少しある	まだ分からない	自分のしたい仕事を1番に考えたいから地域は気にしない
4	はちのへエリア		地域外へ行き戻ってくる	今回の体験でほんの少しだけど地元に興味が出たから
5	はちのへエリア		地域外へ行き戻ってくる	八戸のことではなく他の地域のことも知りたいと思っているから
6	はちのへエリア		ずっと居る	八戸を出る気がないから
7	その他	少しある	地域外へ行き戻らない	外に出たいしやりたいことがあるから

8	その他	少しある	まだ分らない	いろいろやる上で八戸に自分のしたいことが少ないため
9	その他	少しある	地域外へ行き戻ってくる	地域の外に出て比べたいから
10	その他	少しある	地域外へ行き戻ってくる	寄ったりするぐらいかもしれませんが良い所ばかりなので自慢したい
11	出身地	ある	地域外へ行き戻ってくる	外の世界がどんなものなのかを知りたい。そして他の地域の良さを戻ってきて伝えたい
12	出身地	ある	地域外へ行き戻ってくる	他の地域についても知りたいため
13	出身地	少しある	地域外へ行き戻ってくる	地域外から学んできたことを地元を持ち帰りたいから
14	はちのへエリア		地域外へ行き戻ってくる	青森ではできない仕事があるが、地元が好きだから
15	その他	少しある	地域外へ行き戻ってくる	
16	はちのへエリア		まだ分らない	

5. まとめと今後の展望

本事業を通して、学生が本エリアに対して興味を持つようになったことは確実に言える。学生は、たとえ出身地であったとしても地域のことを詳しくは知らない現状が明らかになり、地域の人と関わることで、新たな発見や学びを得られることがわかった。定住となるかは、今後の経験やキャリアによって未知数ではあるが、地域のことを知り地域の人と交流を続けていけば定住につながっていく可能性は見えた。一方で、積極性や主体性がうまれたため、外を見てみたいという志向になる学生も現れた。そのような学生は地域に留めておくよりも、地域外に出ても必ず戻ってきたいと思えるような地域体験交流活動を在学中に継続していく必要がある。

【引用】

(※1) 国勢調査（総務省統計局）

(※2) 井上 丹（2018） 八戸学院大学強化指定部所属学生のキャリアと居住地域に関する研究，
八戸学院地域連携研究センター産業文化紀要27，P67－75.